

東工大文芸部『論理哲学論考』読書会 第三回

高野成章

2015 年 12 月 7 日

進め方

1. 前回のおさらい
2. 今回の範囲の読み直し
3. 小グループのブレインストーミング
4. グループごとにまとめた感想
5. 資料に沿って読む
6. 課題および全体の疑問点について話し合う
7. まとめ

A. 前回までの課題

事態はナンセンスを含むのか？

- 2.031 事態において諸対象は特定の方角で互いに関係している
- 2.033 諸対象が事態において結合する仕方が事態の構造である
- 2.033 構造の可能性が形式である
- 2.034 事実の構造は諸事態の構造からなる

すなわち事態を構成する方法はそれこそ「形式」に従っている。事態は可能性であるから、対象の結合は可能的な形式に従う。

我々は世界の事実から出発し、それらを対象に分解した。対象から考えうる事態を再構築していく。対象、事態は『論考』が行う分析の結果として要請されるものにほかならない。大局的に言い換えると、世界を通じて、論理空間を捉えることが目的である。

- 1.1 世界は事実の総体であり、ものの総体ではない。
- 1.11 世界は諸事実によって、そしてそれが事実のすべてであることによって、規定されている。

において、分析の出発点が事実であることがわかる。ここで「ものの総体ではない」とは、2.01 を見てもわかる通り、「もの」とは「諸対象」のことであり、対象をただまとめるだけでは事実ではないということである。世界(事実)→対象→論理空間(事態)のような流れである。

対象から事態を構成するのに形式が必要ならば、ナンセンスを許す形式（これは「可能的な形式」なのだろうか？）が必要ではないだろうか。ナンセンスを許す形式が存在していたとしても、『論考』において重要ではないはずである（序文にあるように、沈黙しなければならないことである）

さて、前回「事実の論理像が思考である」(3)に対し、なぜ「事態」ではないのかという議論があった。思考とは現実(世界)において我々が行う分析であり、分析は事実から出発する。ゆえに事態ではなく事実と書くほうが妥当だと思われる。事態における像については、我々の思考は可能性の中にあることになる。つまり「思考可能」であるかどうかを考えなければならない。論理形式をとらえるには事実しかないと、論理像は事実から得られるものとも考えられる。また、(2.12)にも現実に対する模型と書いてある。(2.11)はまぎらわしいが、むしろ像から事態に向かうととらえたほうがいいかもしれない。最後に、形式の種類の多さに戸惑ってしまったので以下にまとめる。（[4]p. 47 を参考にした）

抽出の形式(これは[4]での定義)
像の諸要素の有意義な連関の可能性

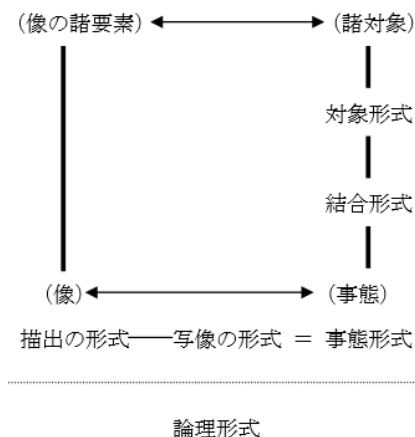
写像の形式(2. 15、2. 17)
抽出の形式によって表示される諸対象の連関の可能性

諸事態の事態形式
事態における諸対象の連関の可能性

諸対象の結合形式
対象が事態に現れる可能性(2. 0141)

諸対象の対象形式
対象がその下に属するある形式的概念

論理形式
任意の像と任意の像の間に(およびそれらによって抽出される任意の事態と任意の事態の間に) 村立する論理的な内部関係の総体



[4]p.47 の図

B. 今回の範囲：像としての命題 (3. 1-4. 128)

キーワード：

思考、命題、表現（シンボル）、命題記号、解明、分析、論理的構文論、ラッセルのパラドクス、概念記法、形式的性質・関係・概念、哲学

0. 序論

前回は事態/対象と像との関係を考えて。今回は、像を用いて分析が行う。そして、対象を捉えるためには論理形式を把握しなければならない。私たちが論理形式を把握する手法こそが像である言語なのである。この範囲では、事実から事態に到達するために、命題を利用する方法を記述している。
事実→対象→像→命題(名)→事態

の流れで論理形式をよりとらえやすく、また思考の限界まで迫っている。

1. 命題とはなにか(3-3. 263)

言語を像として用い、真偽が問えるような文(命題)を導入する。ただし像の真偽とは、像の意味と現実との一致・不一致である(2. 222)

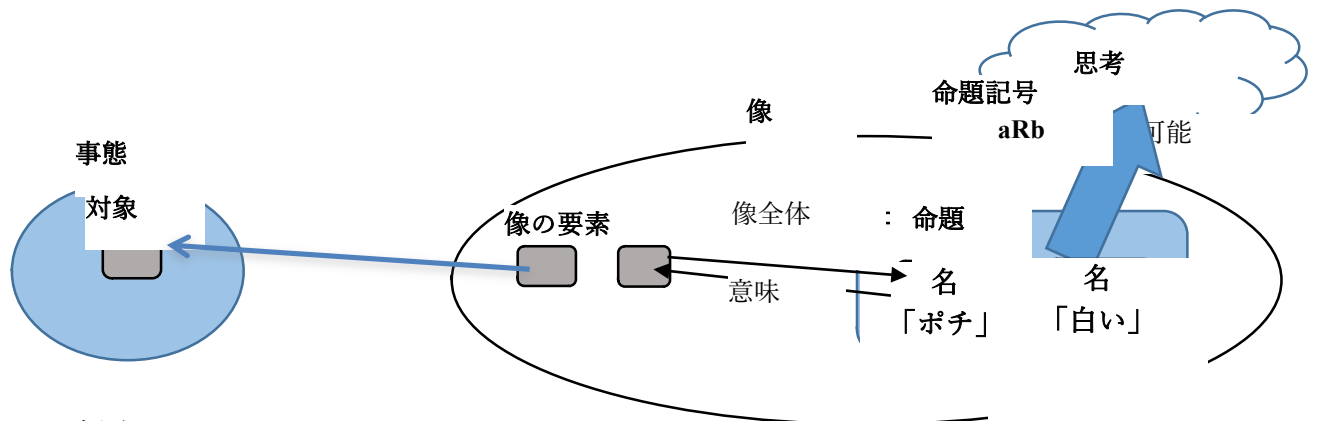
命題：像として用いられているような文

名：命題の構成要素。また、「命題には名の構成要素以外含まれない」。対象の代わりである(3. 22)。また、対象が名の意味にあたる(3. 203)

命題記号:思考を表現するためのもの。各単純記号が命題の名と対応すると、それは分析されたことになる。なお、命題記号の要素を単純記号と呼ぶ。単純記号をまとめて複合記号をつくることも可能。

分析：命題の名に単純記号をすべて対応させること。

下の図の説明：事実から出発、事態を像に対応させる。像として言語を用いることで、なにが思考可能なのかわかりやすくなる。



(i) 命題

「思考は命題において知覚可能な形で表される」

「可能な状況を射影するものとして、命題という知覚可能な記号（音声記号、文字記号、等々を用いる）」(3.1, 3.11)

思考を表現するものは命題であることが分かる。可能な状況とは事態のことである。事態を射影する方法として知覚可能な記号を用いるということは事態が思考可能であるための条件といえるだろう。（逆に知覚可能な記号で表現できなければ、それは思考不可能なはずである）

命題には射影に属するすべてのこと（＝「射影されるものの可能性」、「事実を表現する可能性」、「意味の形式」）が属するが、射影されるもの（＝命題が意味する事実、「内容」）は含まれない。この表現は英語のほう[5]がわかりやすい。

A proposition includes all that the projection includes, but not what is projected. (3.13)

これは当たり前で、「ポチは白い」という命題の中に、実際に「ポチ」は存在していない。この点はかなり重要で、命題はあくまでも意味を含んでいないということが言える。（頭の中だと、言語が自動的に意味に変換されるため、ついつい誤解しやすいと思う。）

(ii) 命題記号と分析

命題は記号であるが、命題を表現するものを命題記号と呼ぶ。すなわち命題の表現手法として命題記号が与えられる。（あとでウィトゲンシュタインが「記号」をどういう意味で使用しているか明確にしたほうがよいだろう）

命題記号とは命題の要素（語）が特定の仕方で互いに関係することで成り立っており、一つの事実である。また、命題は語へと分節化される。(3.14-3.144)

命題記号がひとつの事実であるということは、（机、椅子、本）といった空間的対象から構成されると想定すれば本質が明らかとなる。これらのものの空間的配置が命題の意味を表現する。ここでは命題記号が言語でなくてもよいと読めてしまいそうである。（3. 143-3. 1432）

「思考に含まれる諸対象に命題記号の諸要素が対応する」。例えば、「犬」に対し「a」という命題記号の要素を対応させる。特定の関係に「R」を対応させるといったところではないだろうか。（3. 2-3. 23）

命題記号の要素を単純記号と呼ぶ。

記号を対応させることが分析することである。（命題の名に命題記号である単純記号を対応付けることが単純記号へ分析可能であることであり、それはすなわち「命題の意味の確定」である。

- 1 「ポチは白い」 命題
- 2 「ポチ」「は白い」 名に分解
- 3 $w(x)$ 分析（この場合 x を「ポチ」、 w は「は白い」に対応付けられる）

対象の論理形式を捉えるためには、名の論理形式を捉えるしかない（3. 263）。しかし、命題における名の論理形式を捉えることは循環している。（ある意味で「相互再帰的」と言えるかもしれない。）

（「ミケ」の論理形式を捉えると「ミケは猫だ」という命題ができるが、そのためには猫の論理形式を把握しないといけない）[2]p. 70

「解明」とは名の論理形式をすべて把握することである。すべて把握するということは言語になじんでいること（'bekannt'）に他ならない。

2. 論理的構文論（3. 33-3. 34）

(i) フレーゲの関数

フレーゲは現代論理学を作り上げた。 x は大きいという文であれば、 $f(x)$ といった表記を行う。ここでは省略するが、関数論的に推論を行うことで、論理学がより多くの対象を扱えるようになるらしい。フレーゲ以前の伝統論理学（アリストテレスなど）は三段論法であった。フレーゲは伝統論理学を関数論的な視点から捉え直す。関数論的とは次のようである（なおこれは現在では命題関数と呼ばれている）。「 x は犬である」は x (対象) を変項とすると、真偽を出力する関数となる。

命題関数の入力項として関数も可能である。それはすなわち、対象の概念を対象化している。

例として、「 x という性質の持ち主は人に嫌われる」という命題関数に x = 「わがままである」が入力できる。そして、「わがままである」は「 y (対象) はわがままである」の命題関数にほかならない。結局 y の概念(= y がわがままであること)を対象化しているのである。（[2]p. 80）

(ii) ラッセルのパラドクス

ラッセルのパラドクスはフレーゲの概念記法に対してラッセルから送られてきた問題であり、以下の様なものである：

w を「自分自身に述語づけられない述語である」という述語とします。

をのとき、 w は自分自身に述語付けられるだろうか。いずれの答えからその反対が帰結します。それゆえ、 w は述語ではないと結論せざるをえません。（[2]p. 82）

関数の表記法：「 x (主語)は w (述語)である」を $w(x)$ と表す。

ここで $w =$ 「 \sim は自分自身に述語付けられない述語である」とする。

すると、

$w(x) =$ 「 x は自分自身に述語付けられない関数である」=「 $x(x)$ ではない」

ここで変項 w を x に入れる。 w を入れるということは、ここで自分に述語づけを試みているわけである。結局、

$w(w) =$ 「 $w(w)$ ではない」

となり矛盾である。

実際のところ、

自分自身を述語付けられる例：曖昧という概念は曖昧である。

述語付けられない例：厳密という概念(=x)は厳密ではない。(厳密の基準が厳密でない場合)

(iii) ラッセルのタイプ理論

このパラドクスを解消するためにタイプ理論が考案された。この理論のアイデアは自己言及を禁止させることである。簡単に説明する。

個体をタイプ0

タイプ0の個体に対する述語をタイプ1

タイプ1の述語に対する述語をタイプ2

.....

とする。

そこで原則として、タイプ n に対する述語はタイプ $n+1$ 以上でなければいけないという原則を設ける。このようにして、自己言及は禁止される。このように、個体および述語に対し、階層性を設けるのがラッセルのタイプ理論である。ここでは昭からに自己言及が完全に禁止されている。

(iv) ウィトゲンシュタインの関数とまとめ

一方で、ウィトゲンシュタインが用いる関数はフレーゲ、ラッセルらの関数と決定的な違いがあるということを理解する必要がある。[1]p. 93

一番の違いは、野矢氏が「言語外の対象をいっさい要請しない」とあるように、言語使用のあり方で思考を整理するのがウィトゲンシュタインの考える関数である。

ウィトゲンシュタインの立場は、対象は分析の結果であるということであるから、例えば固有名詞をタイプ0として出発するのではない。(なにから出発するかを改めて言うならば、事実からである)。そもそも、固有名詞として捉えるためには言語全体に熟達していなければならない。対象から始める(ラッセル)のではなく対象に到達するという真逆の方向なのである。

ポチ- x とあれば名を定義域とし、命題を値域にしているにすぎず、ポチが個体であることは考える必要がない。分析の結果として、あとから付与することは可能かもしれない(3. 332)

定義域に含まれている時点ですでに、その命題は有意味でなければならない。自己言及文がナンセンスであり、矛盾を含むものであればそもそも値域に含まれていない。ここは「解明」の考え方と根本的に一致している。

ウィトゲンシュタインの場合、関数は変項に依存している。変項が変われば、関数そのものが変わるのである。例えば[2]p. 97にあるように、「xの母親」という命題に対し、その定義域が人間の場合と霊長類全体の場合だと、その関数は別物であるとしている。定義域と関数を独立に用意してしまうと、「偽」な命題がたくさん作られることになるが、このように依存している場合は「ナンセンス」な命題ができることになる。（関数の定義域外という考え方が近いと思う）。ここは現代論理学という「概念知」と関連しているように思える。

したがって、自分自身を関数に入れることは禁止(restricted)というより、矛盾そのものが実現しない・自然消滅するといったほうが近いだろう(3.333)

最後にフレーゲ、ラッセル、ウィトゲンシュタインのとらえる関数の違いを表にまとめてみる：
(ref[2]p. 90)

	入力(定義域)	出力(値域)	目的
ラッセルの命題関数	対象	命題(意味)	
フレーゲ	対象	真偽	
ウィトゲンシュタインの関数	名(言語)	命題(言語表現)	思考の過程を記述するため

ウィトゲンシュタインの関数は名が示す対象と同時に運動していないのが決定的な違いである。言語内で閉じている。「命題は、あとはイエスかノーかを確かめればよいというところまで、現実を確定しているのでなければならない(4.023)」とあるが、ここでもラッセル、フレーゲとの違いが明確だろう。

3. 哲学、形式的概念(4.1-4.126)

(i) 哲学と自然科学

ウィトゲンシュタインによれば、哲学の目的は論理的明確化を行う活動である。哲学は心理学を導入しているわけでもなく、自然科学でもない。自然科学は真の命題の総体と言われているが、真とは現実と一致しているということである。（ここで自然科学は言語活動であるといっているのだろうか）

この段階で命題が言語において導入され、思考の限界が言語において引かれるという流れにいきつつある。そして、私たちが思考可能に線引きをできるのは内側からだけである。

(ii) 「すべての関係は内的なのか外的なのか」(4.12-4.1252)

内的な性質＝論理形式(4.013)であるが、命題は論理形式を描写することはできない(4.121)。命題を通して示すことしかできないのである。そして、示さうものは語られえない(4.1212)とある。（「語る」＝「命題で描写する」）

ここらへんの「直観で論理形式はとらえるもの」と言わんばかりな流れは「解明」と似ている。

(4.122)で初めて形式的性質、形式的関係が出てくるが、これは「形式の性質」、「形式(構造)の関係」と同じだと思われる。これらはある意味で論じることができるが、関数では表現できない。

(4.126)

(4.126)で出てくる形式的概念は[1]の注釈 43 を参照すると、〈対象〉や〈数〉といったものであり、これらは関数として表現できない。(例:「 x は対象である」と言えない)

しかし、この命題変項は形式的概念を表す(4.27)。命題変項はある固定された形式に従うからである。(4.1271)

その他重要概念 (表現、記号)

表現 (3.31-3.3.18)

表現とは命題の意味を特徴付ける命題の各部分であり、それはすなわち形式(一般形式)と(命題の)内容の特徴付ける。

以下のプロセスで捉えられる、この際に項および関数が導入される:

命題→当の表現(定項)→表現が特徴づける一般形式→一般形式に従う命題の集合

3.313 | 諸命題の一般形式において、当の表現は定項になり、他のすべては変項となる

表現は変項を用いて「関数として」表される。その「関数の」値はその表現を含む命題である

とあるが、これは[1](注釈 20)を参考にする:

「タマは白い」という命題に対し、「は白い」を定項とし、「タマ」を変項とすることは「 x は白い」という新たな命題の可能性をつくる。有意味な命題を作るということは、一般形式に従うことであろう。このようにして、「タマ」の論理形式を解明するのである。

また、命題変項について、それがいかなる値を取りうるかが決まっている(3.316)とあるが、これはナンセンスな命題を排除していると言えるだろう。

記号 (3.32)

記号はシンボルの知覚可能な側面である(3.32)から異なるシンボルが同じ記号を共有することがありうる(3.321)。しかし、表し方が異なるのだから整合性に問題は起こらない。例えば、「タマ(犬)」を表すのに「タマ」と書くこともできれば、「タマ」と発話することも可能である。

シンボルと記号は紛らわしいが、知覚可能でないシンボルの側面はあるのだろうか。これもまた、考えないのだろうか。

記号の使い方を誤ると混同が起きる。また、哲学の全体がこうした混同に満ちている。ここからラッセル、フレイゲの哲学との違いが明確化されていく。

こういった混同が生じないようにさせるために、論理的構文論を導入されている。論理的構文論に基づき記号の論理形式を定める。また、ここでフレイゲの概念記法も同じ状況で提唱されたが、十分のものではないと言っている。(少なからず、用語は継承されている)

真理概念・否定 (4.06-4.0641)

否定はあらかじめ真である命題が想定された上で行われている点で、真の命題と同値といったかんじだろうか。真の領域を定めると別の領域を定まるという感覚だろう。(ref4.0621)

C. 課題・ワーク

- 言語とは命題の総体(4.001)とあるが、もう少し整理してみたい。一般に言われる言語と異なるところはあるのだろうか。(命題は知覚可能な記号であればよい。そうであるとする知覚可能な記号はすべて言語になるのだろうか。)
- 「分析された」「分析可能」のプロセスをもう少し身近に感じてみたい。私たちが「とらえどころのある」簡単な例を作れないだろうか？(3.202, 3.221)
- (4.126)の形式的概念は「特殊」なのか。命題の名に「代表元」的なものが存在するのか。関数で表されない論理形式について、それは現実ではないということなのか。どうやら命題変項が重要である。
- その他みなさんが気になった点についてディスカッション。

D. 備考

『論考』の読み方を習得したい。(キーワードすべてにハイパーリンクをつけたい！)
訓練すれば[3]で紹介されている「シーケンス読み」ができるようになるのか。
また、野矢さんの「メスで解体していく」表現も面白い。

今後はフレーゲの概念記法について掘り下げていきたい。

『論考』[1]の索引を見ると、かなり「単純」という言葉よく使われていることがわかる。とくに「対象は単純である」(2.02)であることはアドラー心理学でも、人生においてであるが強調されている。(ここで心理学をもってくとウィトゲンシュタインに怒られそう)
その意味で哲学の諸問題(無関係な問い)と個人の思考の「絡まり」(認知的不協和など)はどこかで共鳴しているようにも感じる。本来の哲学の仕事は自己をほどく作業にもなっているみたいだ。
(cf. セカイ系、自己と世界の一致、梵我一如、・・・)

言語に馴染むとはどういうことなのか。それは有機的な関係になるのだろうか。どこまで馴染む必要があるのか。胎児にとって、世界はあるのか。(狭義な意味での言語であれば、リービ秀夫あたりが言及していそう)

自然権についてウィトゲンシュタインはどうとらえるか？(そもそも彼には関心はないかもしれない)

ゲーデルも当時その時代にいたわけだが、彼の考えはどうなのか？不完全性定理と論考の相違点とは？

ポアンカレがフレーゲの概念記法を批判したらしい。数学の多様性、成長性がそがれてしまうと[4]。当時の数学者と哲学者の関係はどういうものだったのか。

デイヴィッド・ボームが提唱した「内蔵秩序」比較できるかもしれない。

Cf. 『空像としての世界』ケン・ウィルバー

なにがアプリアリでなにが分析結果であるかを分類すると面白いかもしれない。

つまるところ分析ができることを論じるメリットはなにか？(こういうことを考え出すと、哲学の意味とはなにかを考察していることになるのかもしれない)

E. 参考文献

- [1] ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』 野矢茂樹 訳
- [2] 野矢茂樹 『論理哲学論考を読む』
- [3] 鬼界彰夫 『ウィトゲンシュタインはこう考えた』
- [4] 『ウィトゲンシュタインにおける言語・論理・世界：「論考」の哲学 その生成から崩壊まで』 野村恭史